

初期韓国プロテスタントの誕生と成長： 東アジアキリスト教ネットワークの意味

副題：初期韓国キリスト教の誕生と成長に及ぼした
（中国と日本のキリスト教の影響）

—
イ・ジェグン

● 韓国プロテスタントの始まり

中国(1807、ロバート・モリソン) / 日本(1859、ジョン・リギンズ(5月) アメリカ人6名を含む) / 韓国(1884, ホレイス・アレン、1885、ホレイス・アンダーウッド、ヘンリー・アベンゼラー等)、中国より80年、日本より30年遅れたプロテスタント宣教の開始にも関わらず、韓国で宣教師たちは、韓国がフィリピンに次ぎ東洋で二番目にキリスト教国家になる国であると期待。

キーワード：「後発走者」及び「学習効果」、すなわち、中国と日本の宣教の歴史を見本にし、試行錯誤の最小化+すでに中国と日本で成されているものを韓国の状況にすばやく移植。

● 初期韓国教会の急成長の原因及び中国/日本との関連性

- ① 国の運命が絶体絶命に瀕しているということのゆえに、キリスト教を代案として受容した人が多かった。(1876 江(こう)華(か)島(とう)条約、1882 壬(じん)午(ご)事変(じへん)及び済物(さいぶつ)浦(ほ)条約、1884 甲(こう)申(しん)政変、1894 東学運動/甲(こう)午(ご)改革/日清戦争、1895 乙(いつ)未事変(びじへん)、1896 露(ろ)館播遷(かんはせん)、1904 日露戦争、1905 乙巳條(いっしじょう)約(やく)) cf. 中国/日本も似た現状があったが、韓国とは違って抵抗が強かった。

中国は西洋帝国主義とキリスト教宣教の結合問題、日本は政府主導の和魂洋才または東道西器政策と天皇制国家主義問題

- ② キリスト教が入り、成長することができた底辺、すなわち自生的キリスト教共同体と聖書翻訳が中国と日本との関係の下にすでになされていた。(1882 中国満州ロース訳聖書ルカの福音書、1883 黄海道ウィズソレ教会、1883 日本李(イ)樹(ス)廷(ジョン)聖書) cf. 中国はモリソン訳 1813(新約)/1819(旧約)、初めての改宗受洗者 1814)、日本での初めての改宗受洗者(1865)、教会設立(1872)、聖書翻訳(1880(新約)/1888(旧約))
- ③ キリスト教伝道者と帝国主義侵略者たちが同一主体であった多くの国がキリスト教受容に拒否感を感じたのとは異なり、韓国では帝国主義侵略者が西洋宣教国ではなく、日本であった。(中国：1839-42/1856-60 アヘン戦争、1899-1901 義和団事件[宣教師 220名以上、中国人クリスチャン32,000名以上、韓国は1920年代に社会主義の登場とともに微々たる反感；日本：最初の宣教師の入国後14年ぶりの1873年になってやっとキリスト教禁止令を廃止)
- ④ 韓国はキリスト教の流入を防ぐほどの強力な宗教体系が当時崩壊しており、韓国民族は外来宗教に対する受容度が歴史的に常に他の国と比べて高かった。(巨大支配宗教であった日本の神道と仏教、中国の仏教と道教とは異なり、韓国において仏教は孤立、シャーマニズムは疎外、主に女性が信奉、儒教は道徳慣習として理解)
- ⑤ 後発走者であった韓国に入った宣教師たちの間で協力と連合がよくなされ、互いに争う否定的な試行錯誤を経験しなかった。(1885年最高長老派/メソジスト派福音宣教師が同時に入國、米南北出身の宣教師の協力、国家に関係なく教派連合[アメリカ/カナダ/オーストラリア]、単一福音主義教会設立を期待、宣教地分割政策；中国の場合教派別、宣教類型別、地域別の競争により、「羊泥棒」[sheep-stealingの蔓延])
- ⑥ 民族主義が反キリスト教運動として表れた中国とは異なり、韓国民族主義が進む道にキリスト教が抵抗勢力ではなく、およそ同じ道を歩み、キリスト教と民族主義の結合が主な形態となった。(1890年代開化派民族主義者と英米プロテ

スタント文明の絶対化、1919

3.1運動。当時の全体参加者の17-22%[約20%、女性は65.6%]がキリスト者、しかし当時的人口中クリスチヤン比率は1.5%)

⑦ 他国に類を見ない大リバイバルの大きな働きが起こった。(1900年代朝鮮半島の大リバイバル、日本はリバイバルの歴史がなく、中国は山東半島、満州地域など局地的)

⑧ 自立、自治、自伝を速い時間内に可能とさせたある宣教政策が初期から施行された。

(ネヴィウス宣教政策の採択、リバイバル集会の定着、大リバイバル以後自伝、自治をする韓国プロテstant教会が固着、1907年の重要性[平壌大リバイバル - 長老派独老会と7人の最初の牧師；ネヴィウスは中国山東の宣教師として中国では成功しなかったモデルが韓国では成功])

これらすべての要素が各々十分に韓国教会のリバイバルの妥当な理由であると言えるが、実際はこの中のどれか一つだけではなく、すべての要因が旧韓末(朝鮮末期から大韓帝国までの時期)と日帝時代(日本統治の時代)という時空間の背景下で複合的に作用し、韓国教会が急成長したと言うべきであろう。しかしその背景に同じ東アジアの儒教、漢字文化圏にプロテstantがすでに伝播された状態で多様な試行錯誤の過程を示してくれた中国と日本の事例が模範または反面教師の役割を果たした。したがって韓国プロテstantの誕生と成長ははじめから東アジア文化ネットワークの一部であり、このようなネットワークと相互共存の価値は21世紀東アジアキリスト教の未来のために省察し、摘要すべき重要要素である。